

大阪府の橋下知事は、「治水の王道は河川改修である」という原点に立ち返って、既に本体工事に着手し、三年後の完成が予定されていた榎尾川ダムの建設中止を決めたという。ダムは一〇〇年に一回程度の頻度で発生する大雨(豪雨)の際にも当該河川が氾濫しないことを目標にしているのに対して、三〇年に一回程度の大雨に耐えることができるように河川改修を行い、河川からの溢水があっても人命被害は生じないような対策を講じようということのようだ。

三〇年以上前のことだが、ロンドンのテムズ川の近く(といっても1kmは離れていたと思う)に住んだことがある。入居して間もなく、家の郵便受けにはハザードマップ(災害想定避難図)が入れられており、そこには、テムズ川が氾濫したときには、我が家にも浸水する危険があることが明記されていた。また、子供を学校に連れて行った初日に、学校に浸水があった場合の避難場所を記した地図が渡され、そのときは速やかに迎えに来るようとの指示があった。絶対安全、災害ゼロを

モットーとする日本からの異邦人にとっては、大きな驚きであった。後で、ロンドン都(当時)や国の担当者から話を聞くと、洪水を防ぐためには堤防を作らなければならないが(ちなみに、テムズ川にはダムも堤防らしい堤防もない)、そのためには多額の費用がかかるし、景観も損なわれる。住民

(納税者)は、そのための費用を負担することは望まない(洪水による被害を復旧する方が安くあがる)し、景観も楽しみたいと考えているということとであった。日本の洪水は、全てを押し流すことが多いのに対して、勾配が緩やかなテムズ川の場合は、じわじわ(ひたひた)とくる浸水であるという違いがあるにしても、こういう考え方があるということに強い印象を受けた。

危機管理とリスク管理というこ

続*弁*護*士*月*記

4

治水の王道

橋本 勇

とが言われ始めて久しいが、その根底には危機やリスクをゼロにしなればならないという意識があるように思われる。毎年世界のどこかで必ず起きていた大洪水や直近のニューヨーク・ランドの地震を例にとるまでもなく、自然災害は防ぐことができない。尖閣ビデオの流出は人間の行為

によるものであるが、公務員倫理の研究をいくらやっても防げなかっただろうし、アメリカの外交文書漏洩についても同様であろう。危機は必ず来るし、人災も必ず起きるということを十分に認識したうえで、それを最小限にする対策をと

なければ、「万全」ではないことになる。

河川の氾濫をもたらすような大雨の確率が三〇年に一度であっても、一〇〇年に一度であっても、偶々それに遭遇した人にとっては、そんな確率論は全く意味がないし、その時にその場所に居なかった人は、二年に一度の確率であっても、他人事と感ずるかもしれない。確率論は、当面の政策を樹立し、あるいはそれを正当化するためには有効かもしれないが、災害が生じてしまったときに、一〇〇年に一度のことだから我慢してくださいとは言えないであろう。ダムの建設にせよ、河川改修にせよ、財政的な制約だけでなく、地権者への対応等、計画から完成までは非常に長い時間がかかる。そのことを明らかにしたうえで、「このダムが完成しても一〇〇年に一度、この河川改修が完成しても三〇年に一度の規模の大雨のときには洪水が発生する危険があります。その際の被害はこの程度で、それにはこのように対処します。」ということを示すことが治水の王道ではないだろうか。

(弁護士)